研究代表者	所属学系・職名　社会・歴史学系　准教授 氏　　名　三　宅　正　浩
研究課題	近世大名の編成原理に関する研究 Study on the organization principles of the early modern period Daimyo.
成果の概要	**【研究の背景】** 近年の日本近世史研究は、従来あまり検討されることのなかった様々な分野で実証的な研究が展開される一方、研究深化に伴う個別分散化状況が生み出されている。政治史の分野では、朝幕関係や幕藩関係の具体像、支配・行政の諸相、政治思想の動態的研究等が進展しているが、近世の幕藩政治構造の原理や全体像については、幕藩制国家論以来の 1970 年代～90 年代頃の研究成果がほぼそのまま受け入れられており、近年の豊かな個別研究を組み込んだ新たな像を描く作業は、ほとんどなされていない。 したがって、近世の幕藩政治構造の新たな全体像を構築する準備作業として、第一に、近世大名の成立過程を武家の編成過程として再検討し、第二に、政権に編成される諸大名の側の結集原理を考察することが必要かつ有効である。 **【研究目的】** 本研究は、近世幕藩政治の担い手たる武家（特に大名）について、政権（江戸幕府）による編成と諸大名の側の結集という双方向からの視点で、その編成原理の形成過程の特質を把握して近世政治史を解明する新たな方法論の可能性を探る基礎とすることを目的として遂行した。特に、従来、近世大名が「将軍直参で知行一万石以上の者」（『広辞苑』第六版）と単純に理解・了解されてきた常識を再検討し、今後の近世史研究の基礎として、近世大名という存在を再定義・再定置するための基礎的知見と新たな見通しを学界に提供することを目的とした。 **【研究方法】** 上記研究目的を達成するため、16 世紀末から 17 世紀半ばまで（豊臣期～家綱政権期）を研究対象時期に設定し、以下の**二つ**の研究課題を設定して作業を進めた。 〔１〕豊臣政権・徳川政権による武家の編成過程を実証的に考察し、特に大名（一万石以上）区分が形成される背景と政治動向を時系列的に追う。 〔２〕複数の個別近世大名の史料から、当該時期の大名自身の徳川政権や大名社会に対する認識叙述を拾い出し、幕府や大名家の政治構造との関連を双方向的に考察する。

成 果 の 概 要	【研究成果】 上記研究方法〔1〕にもとづき、豊臣政権期の武家編成秩序について、「御掟・御掟追加」等の重要史料や先行研究に基づいて確認作業を行った。その結果、豊臣政権期にはすでに「大名・小名」という史料文言が多用されていることが確認でき、近世大名区分の淵源は少なくとも豊臣政権期まではさかのぼることが確定できた。そして、豊臣政権期以前のどの段階までその淵源が遡及できるのかについてが今後の検討課題であることを確認した。 なお、徳川政権期の分析については、予算と時間の制約により十分な成果をあげることはできなかった。今後の課題である。 次に、上記研究方法〔2〕にもとづき、個別大名側から考察を実施した。具体的には、①寛永年間の陸奥会津藩加藤家が改易された際の幕府・諸大名の認識の考察、②陸奥中村藩相馬家の徳川政権下における位置付けとその変遷の考察、③伊勢津藩藤堂家における政治思想の考察、を実施した。その結果、各大名の規模や由緒によってある程度の差違はあったものの、近世徳川政権下の大名として一定程度の共通性を抽出することが可能である見通しを得ることができた。今後、さらに具体化することが課題として確認できた。 なお、①の成果については、下記論文として発表した。②・③については、研究代表者が執筆する自治体史等を通して、今後、発表していく予定である。 【主な発表論文】 三宅正浩「会津領主加藤明成改易をめぐる諸認識」（『福島大学人間発達文化学類論集』20、2014 年 12 月）